

吉田健一著作集

XXV



詩と近代
旅の時間

集英社

吉田健一著作集 第二十五卷

詩と近代 旅の時間

昭和五十五年九月二十日 第一刷印刷

昭和五十五年十月四日 第一刷發行

著者 吉田健一

發行者 堀内末男

發行所 株式會社集英社

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號

電話 東京（二三〇）六三六一（文藝出版部）

東京（二三八）二七八一（販賣部）

整版所 株式會社中臺整版

印刷所 大文堂印刷株式會社

製本所 株式會社石橋製本工場

© 1980 Nobuko Yoshida, Printed in Japan

0395-171025-3041 落丁本・亂丁本はおとりかします

吉田健一著作集 第二十五卷 目次

詩と近代

詩と近代

*

ポオ

ボオドレエル

ランポオ

ヴァレリイ

エリオット

*

シャアロット・ブロンテ

ロレンス「息子と恋人」

P・G・ウツドハウス

*

セ

三

西

西

七

四

一〇四

二五

二六

小林秀雄

一三

中原中也

一五

日本の近代詩

一四

*

世紀末の精神と今日

一四

旅の時間

飛行機の中

一五

昔のパリ

一七

大阪の夜

一八

英國の田舎

二六

東北本線

二六

ニュー・ヨークの町

二六

ロンドン

神戸

京都

航海

解題

二六

三〇

三四

三五

三七

詩と近代

詩と近代

先づ近代といふことが問題になる。一般には近代が大體の所では十九世紀の後半から二十世紀の前半に亙る百年間と考へられてゐるやうでもう少し嚴密には普佛戰爭の前後から第二次世界大戰の勃發が人間の歴史の上でこの時になつて始めて生じた譯ではない。その性格は或る集團が文明に達したことが更に精神を刺戟してその一層の働きを促した結果が精神がその働きといふ形で認められるに至り、それがどういふ形のものでも受け入れられながらこれが精神の働きであることだけは必要であつてかうして極めて自由であるとともにその働きを妨げることばかりは決して許されないといふ一つの開けた態度が普及することに存する。その近代はブトレマイオス王朝下のアレクサンドリアにもトラヤヌス帝治下のロオマにもあつたと言へばその指摘を最初に行つたものの名前は擧げるまでもないことである筈である。

我々が現に通つて來た近代を振り返つて見るならばこれ以外に近代といふものの性格を説明する方

法はない。併し一般に見逃されてゐるのは近代といふのがさういふものである時にそれがヨオロッパ、或は後にヨオロッパをなすに至つたものに限られるといふこともないといふことであつて我が國に就て言へることの一つはこの近代の狀態が我々にとつて昨今のことで少しもないといふことである。新古今和歌集の撰進があつたのは西暦の十三世紀の初めで源氏物語の成立年代はそれよりも更に二百年遡る。又ここで間違つてならないのは時代といふものが人間に及ぼす影響にどれだけの限界があつても人間が或る時代になし遂げたことには必ずその時代が何かの形でその姿を映してゐることを廻つてであつて近代と認められるものが近代でない時代に生れることはない。後鳥羽上皇の日本にも紫式部の日本にも近代はあつた。又それは蕪村や菅茶山の日本にもあつた。それでかういふことが次には問題になる。

後期ギリシヤやロオマはまだ我々が今日ヨオロッパと呼んでゐるものをなすに至つてゐなくてヨオロッパの中世紀を通してヨオロッパが形成された後にこれが最初に經驗した近代が何十年か前に我々も始めて近代といふ名前で經驗したもののなのであるが我が國、或はもつと廣く東洋に實質的には幾度かあつた近代、或は一體に近代といふものの後はどうなるのか、その近代で危く保たれてゐる均衡が破れるならば再び文明から野蠻に戻るのだらうか。我が國の歴史に即してこのことを考へて見るならば文明に達してそれが近代の狀態に置かれるに至るといふことが一度でもあつた後は既に近代といふ精神の世界の充實が常にそのうちに崩壞の芽差しを豫感させる性格の一時期が過ぎたのであつてもそれで残るのはやはり文明の狀態であつてその一國、一集團自體が亡びない限りこのことに變りはない。又そこには近代の狀態にあることで得られた成果も又それによつて一層豊かになつた傳統もまだその

ままあつて近代、或はこれを何といふ名前前で呼ぶのであつてもこの状態はそれからはその集團にとつて未知のものでなくなる。唐の時代に支那が達した近代は今日でも支那の一部をなしてゐる。

所がヨオロッパは十九世紀になつて始めて近代を知つた。又それがヨオロッパではさうだつたからこれが世界の歴史の上でも最後に來た時代と我が國でも考へられたことがあつた。そしてそれが第二次世界大戦が始るまで續いたから近代の後はどうなるかといふのがヨオロッパでは現に取り上げていいことの一つになつてゐるとすることが出来るが我々にとつてこのことは改めて占つて見るまでもない。併し明治になつてからの日本に生れた我々がヨオロッパの近代を通して我が國に何度かあつた近代に目覺めたといふことはあつてその上にこの近代といふ名稱が最初に我が國で用ゐられたのもこのヨオロッパの近代に對してなのである。それで近代詩といふ名稱も出來た。この種類の混亂は従つて詩に限らず近代といふことが出て來る毎に起り勝ちなものなので多くの場合それは單に新しいとかヨオロッパ風とかいふことを意味するものに過ぎない。それも今日でも能が能樂堂で舞はれて新古今が文庫本で買へる日本なのである。

この邊で漸く詩といふものにも觸れる餘地が生じる。その詩そのものは文明とも近代とも必ずしも結び付くものではなくてホメロスの詩が作られた西曆紀元前十世紀のギリシャ民族が文明の状態にあつたとは言へない。又記紀、或は詩經に收められてゐる詩に就ても同じやうな狀況が推定される。併しそれとともに詩はどういふ段階にある人間からも切り離せないもので近代には近代の詩があり、それはさうした時代の性格を當然備へてゐて従つて又それが備へてゐるその性格はいつの近代の詩にも共通のものである。この近代といふ時代、或は状態を精神の働きの充實が制御を許さないものと見る

時にそれはさうした洗練、或は微妙といふ形で詩にも現れてその限りではその種類の詩を近代詩と呼んで少しも差し支へない。所がここでも我々が近代詩と稱してゐるものを先づヨオロッパから受け取つたといふことが災して我々は新古今や謡曲を近代詩と考へない。併しもしこれが近代詩でなければ何がさうなのか。フランスの所謂、象徴派の詩人達も定家に比べれば稚拙に感じられることがある。

それで近代詩の觀念が混亂する。現に行はれてゐるものに從へばそれは先づヨオロッパの詩かヨロッパ風の詩であつて近代の性格を備へたものといふことになつてゐるやうであるが文學史上の經緯を離れるならばヨオロッパでなければヨオロッパ風といふのが餘計であつて近代の詩がヨオロッパに始つた譯ではない。併し近代詩といふ名稱は我々の頭の中で初めからヴェルレヌとかヴァレリイとかと結び付いてゐて近代の詩、或はそれならば近代詩をヨオロッパから切り離すのに多少の困難を覺えるに至つてゐる。確かにヨオロッパでの近代の詩はアメリカのボオがその始祖であると見られるが誰もその爲に近代詩をアメリカのものと思ふものはない。これは我々がボオよりも前にヴェルレヌその他を知つた爲かとも考へられる。併しそれで我々が得たそのヨオロッパの、或はヨオロッパ風の近代詩といふものに就ての知識は同じヨオロッパの浪漫派の、或はその他どういふヨオロッパ風の詩に就てもものものと大して違ふことはないものだつた。

併し今までさうだつたからこれからもといふのであるよりもこの近代詩に就ての一種の固定觀念に拘束されてゐては近代の詩といふ實在するものに就ての考へが歪められる。もともとどういふ詩でもがヨオロッパ風のものでなければならぬといふことはないのであつて近代の詩も例外ではない。そのヨオロッパ風といふのが既に曖昧極まる考へ方なのでこれが幕末から明治に掛けての洋式、洋風と

同じ系列のことを指すものならば現在の状況ではさういふことを顧慮する必要がなくなつてから大分たつてゐる。何よりもここでは定家、或は後鳥羽院、或は芭蕉その他をヴェルレエヌとかリルケとかのヨオロッパの詩人達と詩人である點で同じと見做すことをしないことから生じる無理が言ひたいのである。これが全く根據がないことであるのに對してどういふ反證を擧げる餘地もなくて今日でも所謂、世界文學全集と稱する類のものに日本で書かれたものを入れないのと軌を一にする錯誤がそこに認められる。

従つて詩と近代に就て考へるにもそのやうなことに煩されることはない。或は煩されてならないのは世界的に言つて近代、或は何度目かに近代と呼び得る一つの時代が去つたのが極く最近のことであつてその近代の詩はそのまま今日の詩に繋るものだからである。中原中也を實際に知つてゐた人達はいく人も現存してゐてそれがまだ故老といふ程の年でもない。又これが詩、或は言葉の傳統といふものでもあつて中原中也の詩と中村稔の詩の間に認められる違ひは詩人を二人取ればその間にある他ないものに限られてゐて一つの近代が、そして又凡て或る一つの時代が終つたことでそれとともに言葉の流れが杜絶するものでないことを明確に示してゐる。そしてそこから更に遡つて行くことで氣が付くのは中原中也が日本の所謂、近代詩人達の群にそのまま歸屬するものでなくてこの一つの流れが富永太郎邊りからのものであり、そこからは萩原朔太郎さへも通らずに、或はそこを潜り抜けて例へば鷗外の、

褐色かもいろの根府川石ねぶかはしに

白き花はたと落ちたり、

の詩に合するものであるといふことである。この詩の響を中原中也の、

秋色は鈍色にぶいろにして

黒馬の瞳のひかり

或は、

小鳥らの うたはきこえず

空は今日 はなだ色らし、

にその韻律が同じであるといふことは別としても見出すのは難しくない。そこに認められる違ひは再び詩人と詩人の間に必ずある筈のもので更にここでもし近代といふことを言ふならば中原中也の我々自身が最近まで経験してゐた近代、場合によつては半生を過して來たものであるのに對して鷗外のがその前に日本に幾度もあつて日本の一部をなしてゐたものであるのが感じられる。

鷗外の頃まではまだそれで足りたのでヨオロッパが同じ頃に際會してゐた近代は日本をその中に巻き込むに至つてゐなかつた。併し近代を知つてゐる集團は近代に敏感であつて中原中也がもの心付い

た時には日本は再び近代の中にあつた。それはヨオロツパに端を發したものでこれが後に日本の我々を日本に既にあつた近代に目覺めさせる働きをしたのであつても中原中也が先づ知つたのは詩の形でヨオロツパの近代であつてそれはこの詩人にとつて日本の詩の傳統に繋るのに用語が日本語であるといふこと以外に全く何の手立てもなかつたことを意味する。併しそれで充分だつたことは一箇の詩人がそこに現れたことで明かで言葉を有効に用ゐる爲にはその傳統に繋る他ないと同時にその用ゐる方が有効であればそのことでその言葉の傳統に繋るといふ結果が得られる。前に示した鷗外の詩との照應もその一例であるが、

いといと淡き今日の日は

雨蕭々と降り洒ぎ

の詩では今様の韻律が見事に生かされてゐてそれが見事なのはその八百年前にその頃の状況に即して隆盛を極めたこの形式が今度はこの詩人が置かれた状況で言葉を用ゐるのに充分に役立たされてゐるからである。後白河院の頃の日本が近代だつたか或は近代と近代の間に相當する時代だつたかはここでは問題でないのだただ中原中也は近代の詩人であり、その詩にこの久しく使はれることがなかつた形式が再び言葉にその響を與へることになつたことは近代と他のどういふ時代でも、或は要するに二つの距つた時代の間で言葉の繋り、或はその傳統が絶たれることがないことを示してゐる。ロンサルもボオドレエルも同じ十四行詩の形式を用ゐてゐる。三好達治は五七調と七五調を一篇の詩で自

在に使ひこなすことに全く妙を得てゐる。又分類するならばこれも日本の近代詩人の一人である。

それで氣が付くのは詩と近代では重點は詩の方に當然置かれることになるといふことで詩はこれを言葉と考へるならば人間とともにあるものであつても近代はあつたりなかつたりするものでそれがない。近代に生きるといふことを経験したことがあるものならば解る筈であるがこれがどれだけ精神を刺戟してその意味でこれに恵むものであつても近代の状態といふもの自體が我々に決して平穩な日を約束するものでないのである。又それを約束しなくてもいいといふこともない。我々が實際にどういふ暮らし方をするかは我々各自の勝手であつても日々が平穩に過ぎて行くといふ觀念は少くともこれが失はれることで何も精神に加へるものでなくて近代にあつては日々が普通通りに、太古以來同じやうにたつて行くことでなくて精神が常に危険な境地に遊ぶことが意識を領する。それで得られる成果にはそれだけのさういふ代償が拂はれなければならない。

そのことから近代といふものの性格に就てもう一つ明かになることがある。これは恆久的にただそれだけで持續することが出来る状態ではなくて他の状態から生じて再び近代でない状態のうちに收拾されなければならないものである。前に分類するならば三好達治も日本の近代詩人の一人であると書いた。併しこの詩人にはそれだけで言ひ盡せないものがあつて寧ろその方にこの詩人の本領があると思ふべきであり、これは近代詩人であるよりもそれであることから出發した詩人だつた。これは三好達治の初期のものが詩でないといふのではない。もし詩でなければこれは近代詩人でもなかつた。併しその晩年に達した境地での作は少くとも所謂、近代詩の領域を遙かに越えてゐてそこに一人の大